北海道立近代美術館
Hokkaido M se m of Modern Art

入場
無料

映像フェスティバル2012　北海道映像のインスピレーション　2012.3.23fri・24sat・25sun

アピチャッポン・ウィーラセタクン

ニナ・フィッシャー＆マロアン・エル・サニ

Film Festival 2012 - Second Hometown Hokkaido ***Apichatpong Weerasethakul / Nina Fischer & Maroan el Sani***

Film Festival 2012 -
Second Hometown Hokkaido

Apichatpong Weerasethakul /
Nina Fischer & Maroan el Sani

めくるめくイマジネーション…
画面にみなぎる不思議な空気

今、世界が舞台の作家達。
そのルーツは北海道？

2010年「カンヌ映画祭」でタイに初のパルムドール（最高賞）をもたらした映画監督、アピチャッポン・ウィーラセタクン。
同じ2010年にはアデレード、それ以前もシドニーや光州のビエンナーレに選抜されたドイツ人ユニット、ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ。
彼らの作品は、今や世界中の映画祭や美術展で発表されるに至りましたが、過去に北海道に滞在し、作品を制作した事実が語られるのは、意外と少ないのではないでしょうか？
近年、北海道では、映画祭や上映イベントが盛んに行われ、大学や専門学校などの教育機関でもメディア研究のウェイトが増加しています。日ごとに映像文化の裾野が広がり、実際、数多くの映像作家を輩出しています。そんな文化環境の発展に、彼らの存在が少なからず貢献しているに違いありません。
2012年の映像フェスティバルでは、アピチャッポン・ウィーラセタクンとニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニによる映画と映像を特集上映します。作品を通じて、北海道との関わりを再認識するきっかけになれば幸いです。

主催：北海道立近代美術館　協力：トモ・スズキ・ジャパン

表紙上：アピチャッポン・ウィーラセタクン「ブンミおじさんの森」©Kick the Machine Films　提供：シネマライズ　配給：ムヴィオラ
表紙下：ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ「さよなら端島」2008
当ページ：ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ「ザ・ライン」2010
All wokrs by Nina Ficsher and Maroan el Sani：courtesy the artists and Galerie Eigen + Art Leipzig/Berlin

PROGRAM 2012.3.23fri・24sat・25sun

3/23(金)
13:30～
(開場/13:00)
〈約2時間10分〉

アピチャッポン・ウィーラセタクン

「エメラルド」
2007年(11分50秒)

「トロピカル・マラディ」
2004年(118分)

3/24(土)
13:30～
(開場/13:00)
〈約2時間3分〉

アピチャッポン・ウィーラセタクン

「木を丸ごと飲み込んだ男」
2010年(9分17秒)

「ブンミおじさんの森」
2010年(114分)

3/25(日)
13:30～
(開場/13:00)
〈約1時間30分〉

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ

「ザ・ライズ」
2007年(17分)

「さよなら端島」
2009年(17分25秒)

「スノー・ディヴィジョン」
2010年(8分30秒)

「成　フィールド・トリップ」
2010年(29分28秒)

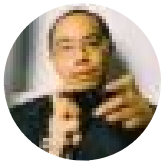
「ザ・ライン」
2010年(12分37秒)

●会場　北海道立近代美術館・講堂

入場無料

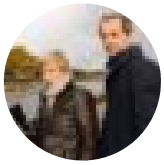
※プログラムは都合により
変更になることがあります

PROFILE



アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong Weerasethakul

1970年バンコク(タイ)生。1994年コーンケン大学で建築学士号取得。1997年留学先のシカゴ美術館附属美術大学で映画製作の修士号取得。1993年に初の短編作品「Bullet」を完成して以来、映画や映像作品の製作を続け、2001年には札幌アーティスト・イン・レジデンスにて札幌に滞在している。
2010年に『ブンミおじさんの森』が「カンヌ国際映画祭」パルムドール(最高賞)を受賞することで評価を定着させた。その功績により、2011年には母校のシカゴ美術館附属美術大学より名誉博士号を授与されている。
主な出品歴として、第7回イスタンブール・ビエンナーレ(2001年)、「アンダー・コンストラクション:アジア美術の新世代」(東京オペラシティアートギャラリー、2002年)、釜山ビエンナーレ(2004年)、台北ビエンナーレ(2005年)、リバプール・ビエンナーレ(2006年)、「SPACE FOR YOUR FUTURE – アートとデザインの遺伝子を組み替える」(東京都現代美術館、2007年)、第55回カーネギー・インターナショナル(カーネギー美術館、2008年)、「東京アートミーティング・トランスフォーメーション」(東京都現代美術館、2010年)、「ヨコハマ・トリエンナーレ」(2011年)など。また「山形国際ドキュメンタリー映画祭」「東京国際映画祭」「東京フィルメックス」での招待上映を始め、せんだいメディアテーク、高知県立美術館、アテネフランセ、愛知芸術文化センターなど日本各地で特集上映が開催されている。



ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ
Nina Fischer & Maroan el Sani

ニナ・フィッシャーは1965年エムデン(ドイツ)生。1992年芸術アカデミー(ベルリン)ヴィジュアルコミュニケーション学科卒。1989～90年リートフェルト・アカデミー(アムステルダム)オーディオヴィジュアル学科。マロアン・エル・サニは1966年デュースブルグ(ドイツ)生。1995年 ベルリン自由大学修士課程コミュニケーション学科および映画学科修了。1993年よりベルリンにて2人のコラボレーションをはじめる。
2007年～2010年、フィッシャー&エル・サニは、札幌市立大学准教授として映像やメディアアートの指導を行った。その芸術活動に対し、これまで、ベルリン芸術大学カール・ホーファー賞や、ヴィラ・マッシモ奨学金によるローマ滞在、DAADドイツ学術交流会の奨学金で東京滞在、パリ国際芸術都市(Cité des Arts in Paris)滞在、アムステルダム市立近代美術館の奨学金など、数多くの賞や奨学金を受けている。
主な出品歴として、フランクフルト国際現代美術展「マニフェスタ4」(2002年)、シドニー・ビエンナーレ(2002年)、光州ビエンナーレ(1995年、2002年、2008年)、「東京―ベルリン/ベルリン―東京」(東京・森美術館/ベルリン国立新美術館、2006年)、イスタンブール・ビエンナーレ(2007年)、アデレード・フェスティバル(2010年)、など、数多くのグループ展やビエンナーレで展示された。また、東京都写真美術館(1999年)、山口情報芸術センター(2005年)、アムステルダム市立現代美術館(2007年)、クンストハウス・グラールス(2009年)、アムステルフェーン・コブラ近代美術館(2010年)、広島市現代美術館(2010年)など各地で個展も開いている。

アピチャッポン・ウィーラセタクン *Apichatpong Weerasethakul*

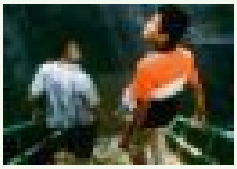
3/23（金） 13:30～（開場／13:00） 〈2作品 約2時間10分〉

エメラルド

バンコク中心市街地に建ち、一時隆盛を極めた「エメラルド」というホテル。これが閉館となったことから、作家は解体前の建物を記録しようとする。また同時に、役者3人のセリフを加え、主人公が生まれ変わって星になるという仏教小説を下敷きにしたドラマとしても構成した。魂とも思われる白い物体がふわふわと室内を飛ぶ映像は圧巻である。

EMERALD（MORAKOT）
タイ／2007／11.50min
カラー／ドルビー5.1
BD（Transferred from:HD）
©Kick the Machine Films　協力：トモ・スズキ・ジャパン

トロピカル・マラディ



「第57回カンヌ映画祭」審査員賞（2004）、「東京フィルメックス2004」最優秀作品賞などの授賞に輝く話題作。タイ山間の小さな村、兵士のケンと村の青年トンは、互いの愛を交歓しつつ静かな日々を過ごしていた。そんな中、牛が次々と殺されてゆく事件がおこり、ケンはそれを調べるために残された足跡をたどって森に分け入っていく。そこには全身が刺青の不思議な男が…。
呪いにより人間が虎に変身する、というタイの民間伝承や中島敦の「山月記」を背景に描かれ、賛否両論を巻き起こした本作は、淡々と描かれる前半から一転して怪奇な様相を帯びる後半、そして衝撃的なラストと、アピチャッポン作品を貫くテーマ「変容」を、作品それ自体が体現し、様々な解釈を可能にしている。

Tropical Malady（Sud Pralad）
タイ、仏、伊、独合作
2004／118min／カラー／SRD／BD（Transferred from:35mm）
©Kick the Machine Films
協力：トモ・スズキ・ジャパン、一般社団法人コミュニティシネマセンター、TAMASA Distribution

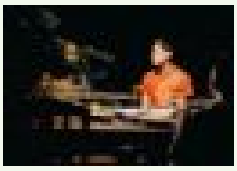
3/24（土） 13:30～（開場／13:00） 〈2作品 約2時間3分〉

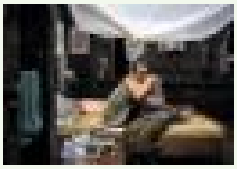
木を丸ごと飲み込んだ男

アピチャッポン作品を語る上で不可欠な「森の中」が舞台。ほとんどジャングルと化したタイの森林公園にツタ植物が繁茂し続けている。とても繁殖力が強く、日光を遮るほど生い茂るため、低木の植物はもちろん、小動物の生命をも脅かす悪者だ。とはいえ、自然保護区という名目上、人為的に生態系を壊すわけにもいかず、伐採を躊躇うレンジャーたち。しかも、その人員は圧倒的に少数で、伐採するにせよ、ツタの繁殖スピードに追いつかず･･･。エコシステムの矛盾や自然に対する人間の無力感を記録風に描いた作品。東京都現代美術館「東京アートミーティング・トランスフォーメーション」展で、インスタレーションとして使われた映像を独立した短編として紹介。

A Man Who Ate an Entire Tree
タイ／2010／9.17min
カラー／ドルビー5.1
BD（Transferred from:HD）
©Kick the Machine Films
協力：トモ・スズキ・ジャパン

ブンミおじさんの森





北野武、ケン・ローチ、アッパス・キアロスタミといった並み居る強豪の作品を押しのけて、2010年「カンヌ映画祭」最高賞に輝いた作品。審査委員長の鬼才ティム・バートンは「この映画には、私が見たこともないファンタジーがあった。それは美しく、まるで不思議な夢を見ているようだった。この映画は僕らが求めているサプライズをもたらした」と絶賛した。
舞台はタイ東北部のある村。腎臓の病に冒され死を間近にしたブンミおじさんは、亡き妻の妹ジェンとトンを呼び寄せる。その夕食の席に現れたのは、19年前に亡くなったはずの妻フェイ。また数年前に行方がわからなくなった息子ブンソンが猿に姿を変えて現れる。愛する者たちとやがてブンミは森に入っていく…。生と死が交錯する不思議なファンタジーが優しく美しく展開し始める。

Uncle Boonmee Who Can Recall His Past Lives
英、タイ、独、仏、西合作
2010／114min／カラー／ドルビーSRD／BD（Transferred from:HD）
©Kick the Machine Films
提供：シネマライズ　配給：ムヴィオラ

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ *Nina Fischer & Maroan el Sani*

3/25（日） 13:30～（開場／13:00） 〈5作品 約1時間30分〉

ザ・ライズ

The Rise
2007／16.9.8min
カラー／ステレオ
BD（Transferred from:HD）

ハリウッド映画のようにはじまるこの作品は、高層ビルのオフィスの窓辺に立つ男とその双子の兄弟の物語である。窓辺に立つ男は、彼の兄弟がビルの周囲をめぐるようにつくられた非常階段を上る風景をすぐ隣の建物から見ているのだ。階段を登る男は、ブリューゲルの描くバベルの塔の中にでも迷い込んだかのように、焦りながら懸命に登りつづける。だが、彼がようやく屋上に出たかと思った瞬間、そこがまた登りはじめなくてはならないゼロからのスタート地点であることを知るのである。ビルの非常階段は、内部と外部、上と下の中間地点である。非常階段では内部や外部、上下を自由に往来できるはずだが、本作はそれを反転させ、日常の風景を、まるで悪夢かサスペンスのように仕立てている。

さよなら端島

Sayonara Hashima（Spelling Dystopia）
2009／17.25min
カラー／ステレオ
BD（Transferred from:HD）

その外観から「軍艦島」という異名をもつ長崎県の端島。幾度にもわたる埋立てによって出来上がった人口の島は、かつては炭鉱として5000人もの人口を抱え栄えたが、1974年の閉山以降、無人島と化してしまっている。今では殺伐とした風景が残っており、中学生の死闘を描いた映画『バトル・ロワイアルII【鎮魂歌】』の舞台モデルとなっているほどである。作家達は、「忘れられた場」としてのこの端島に着目し、島に関する人々の集団的記憶を呼び覚ましたり、組み換えたり、捏造したりするようなドキュメンタリータッチの映像に仕立てている。また、端島のバッググラウンドや現在のイメージを、女子高生が人文字で描く場面が挿入されるたび、記憶の虚構性をゲームのように浮かび上がらせる。

スノー・ディヴィジョン

Snow Division
2010／8.30min
カラー／ステレオ
BD（Transferred from:HD）

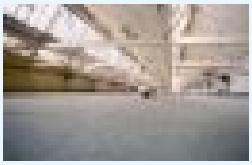
2010年2月、札幌雪まつりの際に撮影された作品。陸上自衛隊の雪像制作隊（スノー・ディヴィジョン）は、山に積もった新鮮な雪を、注意深くトラックに積み込み、約2時間をかけて細心の気遣いで街の中心まで運ぶ。そのように、多くの人材と時間や手間暇を投入してつくられた雪像が数日間だけ人々に公開され、あとは壊されるというはかない運命にあること、またそのような「はかないもの」が国の平和を守る「軍隊」によって担われている、という、華やかな祭りの見えない背景に、ドイツ人の作家達は強い興味を抱いた。彼らは言う「迷彩服に身を包み、絶滅した巨大恐竜の雪像を、粛々と作成する「軍人」たちは、まるで前衛的ダンスか抽象的なパフォーマンスをしているようだ」と。

成田フィールド・トリップ

Nrita Field Trip
2010／29.28min
カラー／ステレオ
BD（Transferred from:HD）

若いカップルが成田空港近くの有機栽培農家の手伝いに来るが、空港の影響が想像以上に生活をおびやかしていることに困惑する。ふたりは成田空港周辺をめぐり歩き、建設当初は近隣農家が一斉に建設反対運動に加わったこと、以降の対応が徐々に変化していったことなどを知っていく。
成田空港は、その計画当初から周辺農家や反対派との争いを幾度も起こしており、現在でも問題を抱えているものの、国民の関心は減少している。本作は、空港問題を扱いつつ、「忘れ去られた場」の背景をテーマとするという作家達の一貫した姿勢がうかがわれる作品である。自然な演技者として登場する二人の男女は、作家達が札幌市立大学に勤務していた際の教え子だそうである。

ザ・ライン



The Line
2010／12.37min
カラー／ステレオ
BD（Transferred from:HD）

本作は線を引く男の物語である。工房跡のような、都市に残された「空白」ともいえる建物。かつては幾人もの人間が働き、にぎわったはずの建物の片隅を舞台として、男は終始、ひとりで一心にただ手で線を引くことだけを繰り返す。作家達によれば本作は「集団が、原初的な仕事の場や伝統的なものづくりの場を失った時に起こる、アイデンティティの喪失」をテーマとしているという。デジタル社会の中で私たちは、その裏側で人が確実に働いていることを忘れがちだ。ハイテクが導入され、人の痕跡も人が働いたという痕跡も消えていく。それは人間の手仕事やその存在を否定することにも結び付くが、作家達はそれを批判をするでもなく肯定するでもなく、ただ線をひく男を淡々と撮影する。

映像フェスティバル2012　北海道映像のインスピレーション

アピチャッポン・ウィーラセタクン
ニナ・フィッシャー＆マロアン・エル・サニ

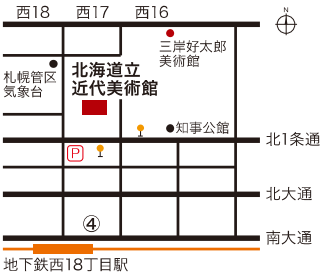
Film Festival 2012 - Second Hometown Hokkaido
Apichatpong Weerasethakul / Nina Fischer & Maroan el Sani

交通案内

地下鉄：東西線・西18丁目駅下車、
④番出口から徒歩5分

JRバス、中央バス：
道立近代美術館バス停下車、徒歩1分

※美術館駐車場（有料）には限りがありますので、
公共交通機関をご利用ください。



北海道立近代美術館
Hokkaido Museum of Modern Art

〒060-0001 札幌市中央区北1条西17丁目
お問合せ：011-644-6882 FAX：011-644-6885
http://www.aurora-net.or.jp/art/dokinbi/